学べるゲラ

第52回
仏の独自外交　礎にドゴール

※2023年12月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

大国にくみせず常に独自の道を目指す。米露冷戦期以降、「第三の道」と呼ばれたフランス外交の基本だ。2003年、米国が国連の承認を得ないまま「大量破壊兵器の保持」を理由にイラクへの武力行使に突き進んだ時、当時のミッテラン仏大統領は反対の論陣を張った。マクロン大統領は台湾情勢をめぐり、「欧州は米中いずれにも追髄すべきではない」と発言し、再び注目を集めた。マクロン氏は大西洋条約機構（NATO）とは別に、米国抜きの「欧州軍」の創設も提唱している。この反骨にも見える外交戦略は、どんな経緯から生まれたのだろうか。

英国の首都ロンドン。ここにその謎を解く鍵がある。テムズ川に近いカールトン・ガーデンズの白いビルの外壁に、黒い碑が飾られている。「フランス国民へ。何が起ころうともフランスの抵抗の炎は消え去ってはならぬし、また消え去ることはない」。仏語で掘られた文言の主はシャルル・ドゴール将軍。1940年6月、亡命政府の本部を置いたこの地からBBCなどを通じ、フランス国民にドイツへの抵抗を呼び掛けた。英国人にあまり知られていないこの場所は、フランス人の「聖地」となっている。

そして国益を考え抜いたドゴールの政策は、やがて花開く。フランスは第二次世界大戦終結後、戦勝国としての地位を確立し、国連安全保証理事会の常任理事国となった。58年に大統領に選出されたドゴールは、マクミラン英首相やダレス米国務長官に「時代は変わり、私たちはもう第二次世界大戦中の私たちではない」と告げた。ドゴ

ールは英米に頼らざるを得なかった第二次世界大戦の反省を、次々と政策に生かしていく。核武装や原子力発電を中心とした他国に依存しないエネルギー政策を進め、フランス外交の独立性を高めた。

ドゴールが目指した独立独歩のフランス外交は、確かに歴代の大統領に脈々と受け継がれている。だが、取り巻く環境の大きな変化にどう対応するか、大統領が直面する困難は増しているようにもみえる。ドゴールは今のフランスや世界を想像できたのだろうか。ドゴールの執務机のそばには、使い古されたフランスやアメリカの地図がかけられている。

【写真説明】ドゴールがフランス国民へ対独抵抗を呼び掛けた演説を記念した碑＝ロンドンで、毎日新聞記者撮影

【写真説明】大統領就任前にドゴールが使っていた執務室＝パリで、毎日新聞記者撮影